

磐田市長賞

かけがえのないもの

静岡市立東中学校

三年 小 倉 みなみ

あなたにとって大切な人は誰ですか？ またその人と過ごす一日一日を大切にしていると言えますか？

私は小さい頃から動物が大好きでした。けれど、ペットを飼うことを許されていませんでした。そのため、妹と空想でペットを飼ったり、時には、自分たちがウサギやねこになりきったりして我慢していました。

時が経ち、四年生のクリスマス。プレゼントに鳥カゴをもらいました。ついに夢が叶ったのです。けれど、実は「鳥かあ。ウサギの方が良かったな。」とも思っていました。

さっそくペットショップに行き、幼い―でも一人で餌を食べられる―セセイインコを二羽飼うことに決めました。妹は青いセセイインコ。私は黄色と黄緑が交ざったセセイインコ。青いから空ちゃん。黄色いからきいちゃん。車で帰る途中にもう名前を決めてしまいました。家についてからもずっと興奮がおさまりませんでした。くりくりした黒い目。スベスベの羽毛。その姿にすっかり魅了されてしまいました。二羽とも初めての世界に驚いていたのか、固まっていました。しかし、二、三日

後には、環境に慣れ始めずいぶん活発になりました。

二羽の一日はまず朝ごはんから始まります。餌箱から、穀物をついばみます。そのあとは羽繕いといって、毛並みを整えたり、さえずったり、それからケンカしたり。インコだって昼寝をします。羽をふくらませてうたた寝している姿はともかわいらしいです。そんな幸せな日々が続き、一歳の誕生日を迎えました。

けれど、その幸せもそう長くは続きませんでした。私のインコのきいが首を不自然に動かして、食べた餌を吐き散らしているのです。それはまるで発作のようにやってきました。やがて、よく羽をふくらませているようになりました。鳥は体調が悪い時、それから寒い時、羽をふくらませて、できる限り体温を保とうとします。だから、ずっと羽をふくらませているというのはイエローカードなのです。冬になり厳しい寒さがやってきました。私たちは寒がるきいのために湯たんぽを入れてあげました。それでもしだいに弱っていき、健康なインコとケージを別々にすることを決めました。一羽になってからというものの、やはりさみしいのでしょうか。インコというのは仲間意識がとても強いものです。私がケージのそばに行くと、必ず、「出して。出して。」というように訴えかけてきます。そして、空のところに力をふりしぼっていきます。そうして冬も越し、二度目の夏がやって来ました。この頃の体重は、正常なインコの半分程で

した。羽にもつやがなくなり、死がせまってくるのを嫌でも思
い知らされました。体が弱りきっても、きいは空のところにい
くことを決してやめませんでした。もう体を動かすことさえき
ついはずなのに……。その絆に私は心をうたれました。

9月。肌寒い日でした。その日はいつにも増して元気がなかつ
たようなのです。ようなというのは、その日に限ってきいのこ
とをよく見ていなかったのです。

次の日の朝。きいは力尽きたように横たわっていました。そ
の姿は今でも忘れることなく私の目に焼きついていきます。私に
とって身近な存在の初めての死でした。きいが亡くなる前日な
ぜちゃんと見ていなかったのだろう。きっとひとりぼっちでさ
みしかったにちがいない。あの時、ちゃんと声をかけてあげれ
ば……。そんな思いが心の中でグルグル回っています。私は、きい
というかけがえのない存在をなくしました。しかし、失って初
めて、自分にとってそれがどんなに大切だったのか気づかされ
ました。もう二度とこんな思いはしたくない。二度とさみしい
思いはさせたくない。だから、後悔しないために「一緒に過ご
せる一日一日を大切にしていこう！」と胸に誓いました。

私たちは泣きながら、土の中に亡きがらをつめました。きい
が大好きだったものと一緒に。

それから再び春がやってきました。きいのお墓の上には、タ
ンポポが咲きほこっていました。タンポポの彩やかな黄色はま

るできいのようにでした。そして私を元気づけてくれる気がしま
した。一瞬強い風が吹きました。その風に乗って、

「ありがとう。きいは幸せだよ。」

という声がきこえた気がします。

あれからもう三年がたちます。今でもタンポポを見るたび、
きいと過ごした日々を思い出します。そして、きいからのおく
りものを。

